

1年生 『ひきざん』の実践を通して

長良小学校 竹村 勝仁
長良西小学校 北嶋 盛久

1 単元名『ひきざん』(1年生)

2 単元について

数と計算領域に関わって、第1学年の目標は、次の通りである。

(1) 具体物を用いた活動などを通して、数についての感覚を豊かにする。数の意味や表し方について理解できるようにするとともに、加法及び減法の意味について理解し、それらの計算の仕方を考え、用いることができるようにする。

また、減法に関わる内容は、次の通りである。

A (2) 加法, 減法

(2) 加法及び減法について理解し、それらを用いることができるようにする。

ア 加法及び減法が用いられる場合について知ること。

ウ 簡単な場合について、2位数などの加法及び減法の計算の仕方を考えること。

これまで子どもたちは、半具体物の操作を通して、10以下の数から1位数をひく減法の計算や、 $16-6$ 、 $17-7$ といった減法の計算、3口の数の加法、減法及び加減混合の式と計算、1位数と1位数をたして和が11以上になる加法の計算を学習してきた。

本単元のねらいは、「10いくつから1位数をひいて、差が1位数になる繰り下がりのある減法の計算原理を理解し、正しく計算できるように習熟を図るとともに、問題作りをできるようにする。」である。また、本単元で大切にしたい中核となる数学的な考え方は、「繰り下がりのあるひき算は、10のまとまりに着目して、減加法や減々法で処理していけばよい。」である。

3 研究の重点に関わって

重点1 内容の系統を明確にした指導計画を作成し、論理に結び付く言語表現にもとづいて、どのような表現をさせればよいかを明らかにするとともに、それを子どもの姿で実現するための指導をすること。

本単元の中核となる数学的な考え方「繰り下がりのあるひき算は、10のまとまりに着目して、減加法や減々法で処理していけばよい。」を身に付けさせていくためには、単元の導入において、この考え方を触れさせていくことが大切であると考え。なぜなら、2つの考え方の違いを単元の導入で触れ理解させていくことで、単元の終末において減数に応じて2つの考え方を使い分けていくことの有用性に気付かせていくことができると考えるからである。また、2つの考え方を単元を通して繰り返し表現させていくことで、考え方を確かに定着させることができると考えるからである。そのために、本時は、10のまとまりに着目して、減加法と減々法で処理をしていけばよいという考え方に触れ、その違いに気付かせていきたい。そこで、単元構造図を描き、指導にあたっていく。(7資料 単元構造図参照)

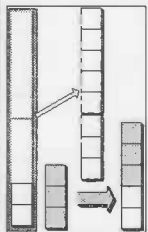
また、本時において、児童に減加法と減々法の違いに気付かせていくために、ブロックを使って操

作をさせながら言語表現させていくことが大切であると考え。なぜなら、1年生の発達段階を考えたときに、操作と言語表現を結びつけることで視覚的、体験的に考え方を理解することにつながり、2つの考え方の違いを理解することができるからである。そこで、ブロックによる操作と結びつけた言語表現を以下のように描いた。

また、ブロックを用いた具体的な操作で答えを求める姿から、さらに念頭操作で答えを求める姿へと移行していけるように、ブロックで行った操作を図を用いて表す表現を描いた。(サクランボ図を用いた表現) 具体的には、 $13 - 8$ の減加法では、13を10と3とみて、10のまとまりのブロックから、8をひいて2とし、2と3を合わせて5という答えを導く。この「13を10と3とみる」ということについて、下のように13から2本の矢印を2本描き、10と3と見たことを表し、さらに10から8をひいて2としたことと、2と3を合わせて5と言うこと絵を導いたことを線で囲んで表すように指導する。こうすることで、ブロック操作と図が関連付けられ、図をみて操作を想起し、ブロックを使わなくても答えを導ける姿になると考える。

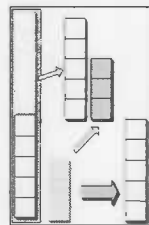
そこで、本時における論理に結びつく言語表現を減加法、減々法の2つの考え方で以下のように描き、指導にあたった。

<減加法>



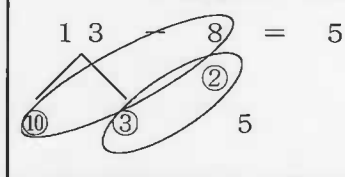
- ① 3から8はひけません。
- ② 10のまとまりから8をひいて2。
- ③ のこりの2と3で5。
- ④ そうすると答は5になります。

<減々法>



- ① 3から8はひけません。
- ② 1のばらから3をひきます。
- ③ 10のまとまりからのこりの5をききます。
- ④ そうすると、答は5になります。

サクランボ図を用いた表現<減加法>



重点2 問題解決に必要な数学的な思考力・表現力を支える基礎的・基本的な知識や技能を確実に身に付けさせていく方途を明確にすること。

上記で描いた言語表現を確実に身に付けさせていくために本時において次のように指導にあたる。

まず、児童一人一人に考え方をブロックを使って操作させた後、ペアで考え方を交流させる。そうすることで、繰り返し考え方を説明することになり、自分の考え方を明確にすることができる。

次に、全体で交流する際には、黒板で説明させたなかで、教師が「どこから何をひいたのですか。」と問い返し、減加法と減々法の違いをよりはっきりとさせていく。そのときに、後から児童が黒板を見直したときに、考え方の違いがはっきりと分かるように「たす」「ひく」「10のまとまり」「1のばら」というキーワードを板書し構造的な板書をしていく。

そして、2つの考え方をより確かにさせるために、2つの考え方について、教師が黒板のブロックで操作しながら言語表現したことを児童に反芻させていく。つまり、操作と結びつけた身に付けさせたい言語表現をこの場できちんと教えることになる。そうすることで、表現が確かに身についていくだけでなく、減加法で考えていた児童は減々法を減々法で考えていた児童は減加法を経験することができ、2つの考え方の違いをよりはっきりさせることにもつながると考える。また、その際も操作をさせながら言語表現させていく。

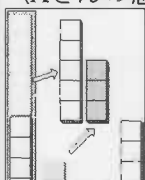

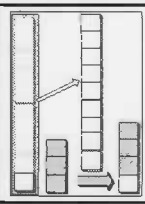
4 実践 I

(1) 本時について

(a) 本時のねらい

(10いくつ) - (8, 9)のひきざんを半具体物を使って操作し、減加法と減々法を比較する活動を通して、減加法は10いくつを10といくつとみて、10から先にひけばよいことに気づき、減加法で計算することのよさが分かる。

(b) 本時の展開 (第1時 / 9時)

場	学習活動	指導と評価
必然	<p>問題(1) うさぎを 13びき かって います。 こやの そとに 8ひき でて きました。 こやの なかに なんびき のこって いるでしょう。</p>	<p>【評価基準】</p> <ul style="list-style-type: none"> 10いくつから1位数をひく、くり下がりのある減法の計算方法を、10のまとまりから1位数をひくことに着目して考えている。 <数学的な考え方>
課題	<p>1 問題をつかむ</p> <ul style="list-style-type: none"> ひき算だと思えます。わけは、(手の動きをしながら)「何ひき残っているでしょう。」だからひきざんだと思えます。 式は、$13 - 8$ だと思えます。 今までは、10といくつのいくつのところから引けたけど、今日の問題は、3のところから引けないよ。 	<p>児童の学習状況 (B)</p> <ul style="list-style-type: none"> ブロックを操作しながら、減加法と減々法の考え方を話すことができる。
追	<p>2 課題をもち、追究する</p> <p>10いくつの いくつの ところから ひけないときの ひきざんの けいさんの しかたを かんがえよう。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="183 985 614 1209"> <p>〈Aさんの意見〉減々法</p>  <p>3から8は引けないから、まず3を引いて、次に5を引いて、5になります。だから答えは5匹です。 <ひくひくほう></p> </div> <div data-bbox="622 985 1053 1209"> <p>〈Bさんの考え〉減加法</p>  <p>3から8は引けないから、10から8を引いて2。2と3で5。だから、答えは5匹になります。 <ひくたすほう></p> </div> </div>	<p>確実に定着させるために</p> <ul style="list-style-type: none"> どの子も問題把握ができるように、PCを使って視覚的に捉えることができるように提示する。 考えをはっきりさせるために何回も繰り返しお話しさせる。 ペア交流をすることで、相手意識をもたせ、表現力を高める。 「どこからひいたの。」と問いかけて2つの方法の違いをはっきりさせる。 考え方を定着させるため、教師の指導のあとに続いて、操作しながら考え方を反芻する 考えが変容した子どもを意図的に指名しひびき合いのよさを味わわせていく。
究	<p>2つの考え方の違いを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> Aさんは、10と3の3からはじめに引いているけど、Bさんは、10と3の10から先に引いています。 Aさん8を3と5に分けて、まず、3を引いてから引きたりないから5を引いてるけど、Bさんは、10から8をいっぺんに引いて残った3と合わせています。 	
振	<p>問題(2) $13 - 9$ のけいさんをしましょう。</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 10px;"> <p><ひくたすほう></p> <p>3から9は引けないから、10から9を引いて1。1と3で4。そうすると、答えは4になります。</p> <p>式 $13 - 9$ $10 - 9 + 3 = 4$</p> </div> </div> <p>3 学習のまとめをする</p> <p>10いくつのいくつのところからひけないときは、10のまとまりからひいて、のこりをたせばよい。</p>	<p>系統の一例</p> <p>小学校1年 『のこりはいくつ ちがいはいくつ』</p> <p>小学校1年 『10より大きいかず』</p>
り	<p>4 本時の学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 10いくつのいくつのところからひけないときは、10のまとまりからひいて、のこりをたせばよい。 	

(2) 考察

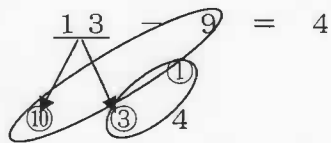
(a) 本時の指導に関わって

本単元では、減々法と減加法の2つの計算の仕方が主な考えとなってくる。その中でも特に減加法は、10の補数関係が理解できていれば、減数があと幾つで10かを考え、その数を被減数の一の位の数に加えるだけで、答えが求められるという簡便さがあるため、減加法を中心に指導していきたい。そこで、「10のまとまりと、1のばらのどちらからひくのか」という意識を高め、 $13-9$ で減加法の考え方を引き出すために、第1時に $15-3$ という、1のばらからひくひき算の計算を位置付けた。こうすることで子どもは、「 $15-3$ のときは1のばらからひけたけど、 $13-9$ は1のばらの方からはひけない。それなら10のまとまりの方からひけばいい。」と考えて、減加法の考え方が引き出せると考えた。

これにより、8割以上の子どもが減加法で考えて答えを導いた。前時は15を10と5とみて、10はそのままで $5-3=2$ を計算した。この時に、十幾つを“10と幾つ”と分けてみて、片方から引くという計算の仕方を導きだした。本時、考えの見通しをもつ過程で前時と比べ、「10のまとまりと1のばらの、どちらからひけばよいか」という意識になれたことが、減加法の考え方を引き出すことに、効果的に働いたのだと考える。

また、ブロックを用いた具体的な操作で答えを求める姿から、さらに念頭操作で答えを求める姿へと移行していけるように、ブロックで行った操作を式にも矢印を用いて表す指導を位置付けた。 $13-9$ の減加法では、13を10と3とみて、10のまとまりのブロックから、9を取って1とし、1と3を合わせて4という答えを導く。この「13を10と3とみる」ということについて、図1のように13から矢印を2本描き、10と3とみたことを表し、さらに10から9を取って1としたことと、1と3を合わせて4という答えを導いたことを、線で囲んで表すよう指導をした。こうすることで、ブロック操作と式が関連付けられ、式をみて操作を想起し、ブロックを使わなくても答えを導ける姿になると考えた。

図1 $13-9$ の減加法の場合

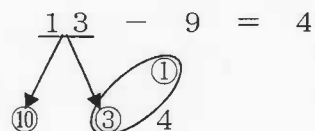


これにより、「もうブロックがなくても答えが求められそうだ。」という意識になっている姿があった。しかし、逆に「どうやってかいたらいいのかわからない。」と悩む子どもの姿も見られた。式に、ブロックで行った操作を矢印や○を使って描き込むことそのものに難しさがあると感じた。「○はたすのかひくのか」といったところも曖昧で、図の意味を明らかにしていく必要がある。

(b) 改善に向けて

ブロックで行った操作を、矢印や○を使って式に描き込むことは、“描き方”の指導が必要である。まず、矢印で数を分けるという表記は、これまでの単元「いくつといくつ」などで、数の補数関係を学習する段階で導入し、使いこなしていけるようにする指導が必要である。また、○で囲むという表記についても、その表記にすることで、たすのかひくのかを定義付けしていくことで、分かりやすくすることができる。例えば、○はたすときのみ使用することになると、図2のように、すっきりとした表記となり、分かりやすくなる。この表記の仕方については、今後実践を通して吟味していく必要がある。さらに、ブロックの操作を全員で行いながら、一つ一つの操作を、式に描き込んでいくという丁寧な指導を行うことが、この図を使いこなせるようにするために必要である。今後は、このようなことを大切にしながら、指導にあたりたい。

図2 $13-9$ の減加法の場合



5 考察

(a) 本時の指導に関わって

本時、子どもたちが用いた考え方は、以下のものであった。

問題 (1)

減加法・・・8人 減々法・・・25人

問題 (2)

減加法・・・17人 減々法・・・16人

この結果と授業での児童の様子から次のような分析をした。

- ①問題 (1) において、減加法と減々法の2通りの考え方に分かれてきたことから、問題を $13 - 8$ としたことで減加法に考え方が流れていかなかったと考えられる。
- ②問題 (2) において、減々法から減加法の考え方を使った児童が多くなったことから、問題 (2) を $13 - 9$ と設定したことが考えられる。減数が9になれば、10から9をひけば簡単にできるという減加法のよさを感じて減加法で考えた児童が増えたと考えられる。しかし、「まだ、やったことがないやり方だからひくたす(減加法)でやりました。」という児童も見られた。
- ③問題 (1) で一人一人操作しながら考え方を説明している段階では、たどたどしかった説明が問題 (2) においては、自分のものとなり自信をもって説明する児童が増えた。このことから、ペアでの交流、全体での交流、そして、理想の表現を反芻する活動が有効であったと考えられる。また、操作を伴って表現することで、操作の手順がはっきりして、思考の流れがよりはっきりとした。

(b) 改善に向けて

導入において、既習との違いを明確にして課題を共有していったが、既習との違いを全ての児童が想起できていたとはいえない。それは、既習内容が1学期も内容であるからだと思われる。また、本時は、 $13 - 8$ を問題 (1) に位置付け、減加法、減々法の2つの考え方に触れさせていくことをねらったが、全ての児童が2つの考え方を理解できたとはいえない。そこで、単元の導入において、10いくつのいくつから引ける問題を復習する時間を位置付けていきたい。そうすることで、既習を想起しやすくするとともに、減加法の考え方を導き出し易くなると考える。また、本時において、問題を $13 - 9$ とすることで、減加法の考え方を確かに身に付けさせ、その後の時間において減々法を身に付けさせていけるようにしたい。

また、身に付けさせたい言語表現を明確にして、全員の児童に自分の考えを繰り返し表現させ、操作を伴って言語表現させることは、考え方を定着させるためには有効であったと考えられる。しかし、実践 (1) ブロックを用いた操作活動にとどまり、図を用いた表現をさせていくまでには至らなかった。そこで、実践 (2) においては、図(サクランボ図)を用いた表現をさせていきたい。そうすることで、念頭操作で答えを導き出していくことにつながっていくと考える。

(c) 児童の動きや発言など

○課題を把握する場面

(素材の提示後)

T: 式は、 $13-8$ でいいですか。(はい。)

T: では…。答えはわかりますか? 分かる人? (ほとんどの児童挙手) むずかしいなあと思う人?
(3人)

T: そうかあ。難しい人もいるんだねえ。今日の問題は、どこが難しいのかなあ。

C: 前までの、問題は、 13 ひく 3 みたいにひける問題だったけど、今日の問題は、 3 から 8 がひけないんだと思います。どうですか。

C: はい。えっと、前は、…前っててどんな問題だったっけ? (T: 前やった問題は $13-3$ とかだったね。) まえは、 1 のばらの 3 から 3 をひいて出来たけど、今日の問題は、…ひけないんだと思います。どうですか。

T: そうか。今までの問題は、 $13-3$ みたいに 3 から 3 がひける問題だったけど、今日の問題は、 1 のばらの 3 から 8 は引けないような問題ということだね。じゃあ、今日は、そのことをみんなまで勉強していきましょう。

既習の掲示から、既習のと違いを見つけ本時の課題をもつことができた。しかし、より一般化を図った「 10 いくつのいくつからひけないときのひき算の計算仕方を考えよう」という課題を作り出すまでには至らなかった。

○追究する場面における教師の指導・援助

(全体の交流で減々法「 2 つひき」、減加法「ひいてたす」が示されてから)

T: じゃあ、ひいてたすをやった人は、 2 つひきをまだやってないよね。 2 つひきをやった人はひいてひいてをまだやっていないよね。だから、これから、先生といっしょに 2 つのやり方を練習しましょう。ブロックを準備しましょう。・・・いくよ。

T: 3 から 8 はひけませんよね。(3 から 8 はひけませんよね。)

はじめに、 1 のばらから 3 ひきますよね。(はじめに、 1 のばらから 3 ひきますよね。)

次に、 10 のまとまりから 5 ひきますよね。(次に、 10 のまとまりから 5 ひきますよね。)

そうすると、のこりは、 5 になります。どうですか。(そうすると、のこりは、 5 になります。どうですか。)

T: じょうずにできた。もう一度やってみるよ。

※子どもの動きに注意しながら、同じようにもう一度行う。

T: すごい。大きな声で出来るようになったね。では、だいたい先生と同じでいいから、 3 回お話ししてみましょう。はい、立ちましょう。

C: 3 から 8 はひけませんよね。・・・(一人一人操作しながら話す。)

T: みんな、上手にお話しできるようになったねえ。これでみんなは、 2 つひきの名人だね。次は、ひいてたすだね。やってみるよ。

※減々法のとおり同じように表出させる。

T: じょうずにできました。これで、ひいてたす名人にもなれたね。みんな、きょうは、 2 つのやり方とも上手に出来るようになってすごいなあと思うよ。じゃあ、この問題だったら、みんなはどっちのやり方でやりますか? ($13-9$ を提示する。)

C: (ひいてたす! 2 つひき! ...)

教師の師範のもと、 2 つの考え方を表出させたことで自分の考え方がより確かになるとともに、まだやっていたいなかった考え方も定着させることができた。

5 実践Ⅱ

(1) 本時について

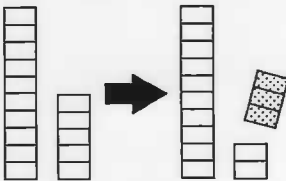
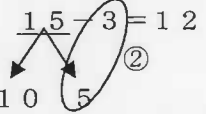
(a) 本時のねらい

2位数から1位数をひいて差が1位数になるひき算の答えの求め方を、ブロックを操作して式に表し、式を読む活動を通して、1のばらから全部ひけないときは、十幾つを「10とあと幾つ」とみて、10からひけばよいことに気付き、答えを求めることができる。(数学的な考え方)

(b) 本時の展開 (第2時/9時)

難	ねらい	学習活動	教師の指導
素材提示	<p>本時の問題は13-9の式に表され、「幾つ」からは9をひくことができないことが分かり、ブロックを使ってひき方を考えようとする意欲をもつ。</p>	<p>1 問題を読み、本時の課題を見付ける。</p> <p>うさぎを、ぜんぶで13わかっています。こやのそとに9わでていきました。こやのなかには、なんわのこっているでしょう。</p> <p>・式は13-9です。わけは、うさぎが13羽います。9羽出ていきました。「何羽残っているでしょう」だからです。</p> <p>しょうこをはつきりさせて、13-9のこたえをもとめよう。</p>	<p>教師の指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題場面を手による操作でとらえようとしている子を価値付ける。 ・前時との違いを比べて「今日は幾つからひけない。」という意見をもとに課題化する。 <p>評価規準【数学的な考え方】</p> <p>10のまとまりから減数を取ればよいことに気付き、答えを求めることができる。(ブロック操作)</p>
課題化	<p>ブロックを使って答えを求め、考えの根拠を明らかにすることができる。</p>	<p>2 課題解決に取り組む。</p> <p>・ブロックを操作して答えを求める。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><減加法></p> <p>10から9をとって残った1と3をたす。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><減々法></p> <p>3とって、残りの6を10からとる。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><数えひき></p> <p>13このブロックから順番に1つつ合計4つつ取り、残りを求める。</p> </div> </div>	<p><机間指導の中で></p> <ul style="list-style-type: none"> ・3から9ひけずに操作が止まってしまった子 10の方からも取れると助言し、一緒に答えを見付ける。 ・減々法で解決した子 「9を1回でとるやり方もあるみたいだよ。」と声を掛け、減加法の取り方に気付けるようにする。 ・減加法で解決した子 「10から9ひいて、3をたしたんだね。この途中の式は書けるかな。」と声を掛け、式に表すよう促す。 ・10の補数関係をもとにブロックを数える姿を価値付ける。 ・ブロックを黒板と同じように並べることが難しい子には、問題を一緒に読んで並べる。
課題成立	<p>「13を10と3」とみたり、「9を3と6」とみたりすれば、既習のひき算が使えることに気付く。</p>	<p>3 全体交流をし、答えの求め方を式に表して明らかにし、それぞれを比べ、「違うこと」と「同じこと」を見付ける。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><減加法></p> $\begin{array}{r} 13 - 9 = 4 \\ \text{⑩} \quad \text{③} \\ \hline 10 - 9 = 1 \\ 1 + 3 = 4 \end{array}$ </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><減々法></p> $\begin{array}{r} 13 - 9 = 4 \\ \quad \text{③} \quad \text{⑥} \\ \hline 13 - 3 = 10 \\ 10 - 6 = 4 \end{array}$ </div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・今までにならった式になったよ。 ・10から9を全部取るのと、9の3から3とって10から6取ることが違うよ。 ・どの考えも、10からもひいているよ。 <p>4 15-9の求答の式やさくらんぼ図から、答えの求め方を考える。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>① $15 - 9 = 4$</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>② $15 - 9 = 4$</p> </div> </div> <p>・①は15を分けて10からひいたよ。</p> <p>・②は9を分けて5と10からひいたよ。</p> <p>いくつかからひけないときは、10のまとまりからもひけば、こたえがわかる。</p> <p>5 練習問題に取り組む。</p> <p>(1) 12-9 (2) 17-9</p> <p>6 本時の学習をふりかえる。</p> <p>・10からひけばいいって分かったよ。</p>
課題解決	<p>(十幾つ) - (幾つ)の計算に習熟する。</p> <p>本時の学習を自己評価する。</p>		
一般化			

6 資料 単元指導計画（全時間）

<p>I次 1. 十幾つー幾つ</p>	<p>【本時のねらい】十幾つから1位数をひいて、差が十幾つになる減法の計算の仕方を考える活動を通して、十幾つを「10とあと幾つ」とみて、幾つからひけばよいことに気付き、答えを求めることができる。</p>	
<p>場 必然 課題 追究 振り 返り</p>	<p>学習活動</p> <p>おかしが15こあります。3こ食べます。おかしは何個残るでしょう。</p> <p>1 問題を読んで立式し、課題をもつ。 ・手の操作を根拠に立式する。</p> <p>15 - 3の計算の仕方を考えよう。</p> <p>2 ブロック操作を用いて、計算の仕方を明らかにする。</p>  <p>・全体交流をする。 15は10と5です。 5から3を取ると2です。 10と2で12です。答えは12です。</p> <p>3 考え方を式で表す。 15の10はそのまま、5から3を取る。</p>  <p>4 類題を解いて、一般化する。 5 練習問題に取り組む。</p>	<p>指導と評価</p> <p>【評価規準】＜数学的な考え方＞ 十幾つから1位数をひいて、差が十幾つになる減法では、十の位はそのまま、一の位の数同士で計算すればよいことが分かる。</p> <p>児童の学習状況（B） 15を10と5とみることで、$5 - 3 = 2$、$10 + 2 = 12$と既習の計算を使って答えを求める。</p> <p>確実に定着させるために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5から3をひいた子を価値付け、10はそのまま、幾つの方からひけばよいことを押さえる。 ・課題解決後、もう一度全員でブロック操作を行い、共通理解する。 ・ブロックを数に置き換えて、操作を式に表す。
<p>I次 2. 減加法①</p>	<p>【本時のねらい】2位数から1位数をひいて差が1位数になるひき算の答えの求め方を、ブロックを操作して式に表し、式を読む活動を通して、1のばらから全部ひけないときは、十幾つを「10とあと幾つ」とみて、10からひけばよいことに気付き、答えを求めることができる。</p>	
<p>場</p>	<p>学習活動</p> <div style="text-align: center; font-size: 4em; font-weight: bold;">本時</div>	<p>指導と評価</p>

<p>1次</p> <p>【本時のねらい】十幾つから1位数をひいて、差が1位数になる減法の計算問題に</p>	<p>場 学習活動</p> <p>3. 減加法②</p> <p>取り組み、減加法に習熟する。</p>
<p>【評価規準】<表現・処理></p> <p>十幾つから1位数をひいて、差が1位数になる減法の計算の仕方(減加法)ができる。</p> <p>児童の学習状況(B)</p> <p>減加法の計算のしかたを理解し、正しく計算することができる。</p> <p>確実に定着させるために</p> <p>・最初はフロックを用いて動かしながら話せるようにする。</p> <p>・フロックで話すことができたから、式を示しながら話せるようにする。</p> <p>・減加法に習熟するまで練習問題に取り組む。</p>	<p>場 学習活動</p> <p>4. 減手法</p> <p>【本時のねらい】被減数の一の位の数と減数が近似した、十幾つから1位数をひいて差が1位数になる減法の計算のしかたを考える活動を通して、減手法の考え方が分かります。</p>
<p>【評価規準】<数学的な考え方></p> <p>十幾つから1位数をひいて、差が1位数になる減法の減手法での計算のしかたが分かる。</p> <p>児童の学習状況(B)</p> <p>1のばらの数だけひいて、残りを10からひくという計算のしかたができる。</p> <p>確実に定着させるために</p> <p>・フロックを用いて操作し、減加法の仕方を明らかにする。</p> <p>・12を10と2に分けて、先に2の方からひくようにする。</p> <p>・被減数の一の位の数と、減数の差が小さい練習問題に取り組ませ、減手法の方が効率的な場合があることに気付けるようにする。</p>	<p>場 学習活動</p> <p>1次</p> <p>4. 減手法</p> <p>【本時のねらい】被減数の一の位の数と減数が近似した、十幾つから1位数をひいて差が1位数になる減法の計算のしかたを考える活動を通して、減手法の考え方が分かります。</p>
<p>【評価規準】<数学的な考え方></p> <p>十幾つから1位数をひいて、差が1位数になる減法の減手法での計算のしかたが分かる。</p> <p>児童の学習状況(B)</p> <p>1のばらの数だけひいて、残りを10からひくという計算のしかたができる。</p> <p>確実に定着させるために</p> <p>・フロックを用いて操作し、減加法の仕方を明らかにする。</p> <p>・12を10と2に分けて、先に2の方からひくようにする。</p> <p>・被減数の一の位の数と、減数の差が小さい練習問題に取り組ませ、減手法の方が効率的な場合があることに気付けるようにする。</p>	<p>必然</p> <p>1 問題を読んで立式し、課題をもつ。</p> <p>2 フロック操作を行い、計算の仕方を明らかにする。</p> <p>3 考え方を式で表す。</p> <p>4 類題を解いて、一般化する。</p> <p>5 練習問題に取り組む。</p> <p>追</p> <p>課題</p> <p>1 11-8の計算のしかたを話す。</p> <p>2 2と1で3です。答えは3です。</p> <p>3 考え方を話し、全体で話す。</p> <p>4 個人、ペア、全体で話す。</p> <p>5 11は10と1ですね。</p> <p>6 1から8はひけないので、10から8をひいて2です。</p> <p>7 2と1で3です。答えは3です。</p> <p>8 練習問題に取り組む。</p> <p>9 計算のしかたを話しながら取り組む。</p> <p>10</p> <p>11 12-3=9</p> <p>12</p> <p>13</p> <p>14</p> <p>15</p> <p>16</p> <p>17</p> <p>18</p> <p>19</p> <p>20</p> <p>21</p> <p>22</p> <p>23</p> <p>24</p> <p>25</p> <p>26</p> <p>27</p> <p>28</p> <p>29</p> <p>30</p> <p>31</p> <p>32</p> <p>33</p> <p>34</p> <p>35</p> <p>36</p> <p>37</p> <p>38</p> <p>39</p> <p>40</p> <p>41</p> <p>42</p> <p>43</p> <p>44</p> <p>45</p> <p>46</p> <p>47</p> <p>48</p> <p>49</p> <p>50</p> <p>51</p> <p>52</p> <p>53</p> <p>54</p> <p>55</p> <p>56</p> <p>57</p> <p>58</p> <p>59</p> <p>60</p> <p>61</p> <p>62</p> <p>63</p> <p>64</p> <p>65</p> <p>66</p> <p>67</p> <p>68</p> <p>69</p> <p>70</p> <p>71</p> <p>72</p> <p>73</p> <p>74</p> <p>75</p> <p>76</p> <p>77</p> <p>78</p> <p>79</p> <p>80</p> <p>81</p> <p>82</p> <p>83</p> <p>84</p> <p>85</p> <p>86</p> <p>87</p> <p>88</p> <p>89</p> <p>90</p> <p>91</p> <p>92</p> <p>93</p> <p>94</p> <p>95</p> <p>96</p> <p>97</p> <p>98</p> <p>99</p> <p>100</p>

<p>1次 5. 減加法と減々の使い分け</p> <p>【本時のねらい】十幾つかから1位数をひいて、差が1位数になる減法に多い、減加法や減々法の場合に応じて用い、答えを求めることができる。</p>	<p>場 学習活動</p>	<p>必然 1 カード取りをして、た<やさんは8枚、ゆかりさんは15枚取りました。どちらが何枚多く取ったでしょう。</p> <p>1 問題を讀んで立式し、課題をもつ。 ・手の操作を根拠に立式する。 ・求差の場面でもひき算となることを確認する。</p> <p>2 問題の答えを求め、 減加法や減々法を使って答えを求めよう。</p> <p>3 全体交流をする。 ・計算のしかたを話す。 ・「どちらが何枚多く取った」という問題の答え方を考える。</p> <p>4 練習問題に取り組む。</p>	<p>1次 6. お話づくり</p> <p>【本時のねらい】式と絵を見て、十幾つかから1位数をひいて、差が1位数になる減法となる求残や求差の問題を作ることができる。</p>	<p>場 学習活動</p>	<p>必然 1 絵を見て気付いたことを話し合う。 2 絵を見て問題をつくらせてノートに書く。 ・求残と求差の問題を、それぞれ1つずつくる。 (例1) とんぼ13匹、葉っぱにとまっています。6匹飛んでいきました。残りは何匹でしょう。 (例2) 赤いお花が13本、黄色いお花が6本あります。どちらのお花が、何本多いでしょう。 3 つくった問題を交流し、式が13-6でよいか話し合う。 ・手の操作を根拠に立式する。 4 いろいろな数で、十幾つ-幾つの問題をつくり、友達と出し合って互いに解きあう。</p>	<p>1次 7. ひき算のきまり</p> <p>【本時のねらい】ひき算の計算カードを並べる活動を通して、被減数と減数、答えの関係が分かる。</p>	<p>場 学習活動</p> <p>必然 1 計算カードを使い、ひき算の練習をする。 ・個人で繰り返し練習したり、ペアで問題を出し合ったりする。 ひき算カードを並べて、どんなきまりがあるか調べよう。</p> <p>2 ひき算カードを机の上に順番に並べる。 ・被減数を縦に揃え、減数を横に揃えて並べる。 ・ひき算カードの答えを考えながら、裏返していく。 3 気付いたことを交流する。 左の数(被減数)が1増えると、答えが1増える。 右の数(減数)が1増えると、答えが1減る。 4 もう一度カードのを使ってひき算の練習に取り組む。</p>	<p>課題 追 究</p> <p>被減数と減数を揃えて、ひき算カードを並べることができる。また、念頭でひき算の計算ができる。</p> <p>確実に定着させるために</p> <p>・最初に幾つかカードを並べて見せ、見通しができるようにする。 ・きまりを使って念頭で答えが言えるようにした姿を価値付ける。</p>
--	---------------	---	--	---------------	--	---	--	---

1次	【本時のねらい】 計算カードを使っていろいろなゲームを行う活動を通して、十幾つから1位数をひいて、差が1位数になる減法に習熟する。
8. カードゲーム	

場	学習活動	指導と評価
必然 課題 追究 振り返り	1 たし算カードを使って行ったゲームを振り返る。 ひき算カードでゲームをして、ひき算名人になろう。	【評価規準】 <関心・意欲・態度> 計算カードを使って、仲間と意欲的に計算ゲームをすることができる。
	2 ゲームを行う。 ・大きさ比べ	児童の学習状況 (B)
	2人組になり、計算カードを互いに1枚ずつ、式の面を向けて出し合い、答えが大きい方が勝ち。	念頭で1位数をひいて差が1位数になる減法の計算ができる。
	・ひき算カルタ 式の面が上になるように、机の上に重ならないように広げる。 1人が答えを言って、その答えになるカードを取り合う。	確実に定着させるために ・裏を見なくても勝ち負けが分かる姿を価値付ける。 ・子どもの実態に応じて、ペア、グループ、学級など学習集団の形態を工夫する。

1次	【本時のねらい】 いろいろな問題で、1位数をひいて、差が1位数になる減法の計算に習熟する。
9. 練習	

場	学習活動	指導と評価
課題 追究 振り返り	たくさん問題に挑戦して、ひき算大名人になろう。	【評価規準】 <表現・処理> 1位数をひいて、差が1位数になる減法の計算を、確実にすることができる。
	1 教科書の練習問題に取り組む。 ・答えのプリントを見ながら、自分で答え合わせをする。	児童の学習状況 (B)
	2 計算ドリルや練習プリントに取り組む。 ・自分で答え合わせをして練習を進める。	念頭で1位数をひいて差が1位数になる減法の計算ができる。また、文章問題に正しく答えることができる。
		確実に定着させるために ・児童一人一人の習熟やつまずきに合わせ、個別指導に当たる。 ・答えのプリントを準備しておき、自分で答え合わせができるようにする。 ・計算ドリルや練習プリントなどを準備しておき、個人の習熟に合わせてどんどん取り組ませる。